



「障がいのある人も、ない人も安心して暮らせる地域」を目指して

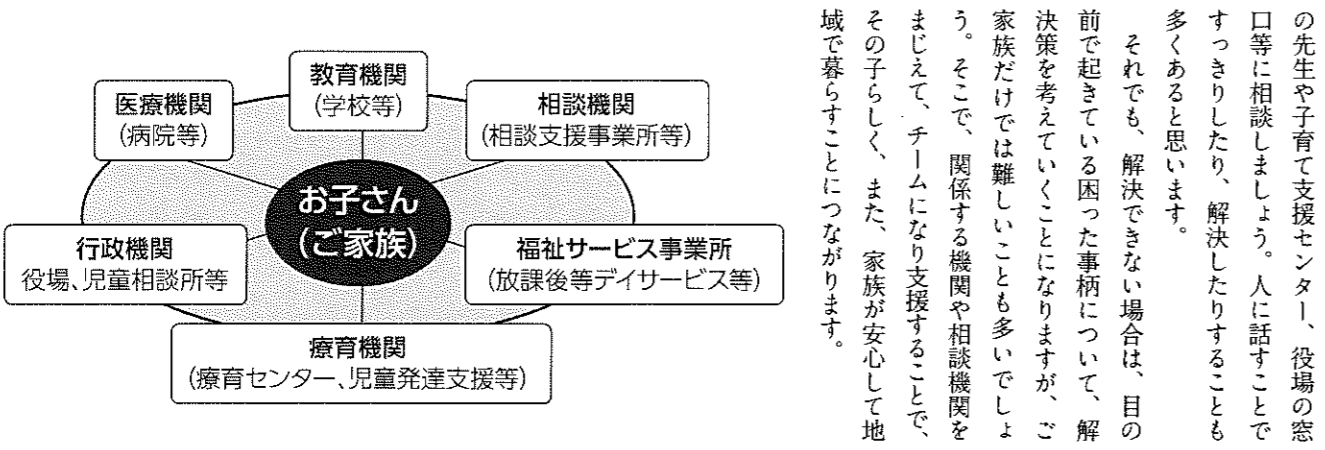
障がいのある方やご家族への日常生活の相談を行う相談支援専門員さんへインタビューを行いました。

障がいのある子には、どんな子がいるのですか？

障害者総合支援法では、①知的障がい②身体障がい③精神障がい、の3つが定められています。ゆいっとには、精神障害に含まれる発達障がいや自閉スペクトラム症の診断がある子が多く相談にいらつしやいます。

障がいのある子たちは、どういうことが苦手の特徴がありますか？
障がいの種類によりですが、相手の発言の意図をくみ取ることが苦手だったり、自分の期待されていることが分からなかったりします。また、自分の考えや思いをうまく伝えることが苦手な子もいますね。
そういった子たちには、私たちはどのように接したら良いでしょうか？
例えば、大声をあげて泣いてしまったり、周りのものを投げてしまったりといったことは、どんな子どももすることです。その子に障がいがあるとか、その行為自体に着目するのではなく、「この子にとって、何か泣くほど辛いことが起こったんだ」と理解し、受け入れてあげてほしいです。「おもちゃが欲しかったんだよね」、「悲しかったね」など、その子が考えていることを代弁してあげると良いかと思えます。ただ、通じがりの子どもに話しかけることに抵抗がある人もいます。その中で、そこは「何か悲しかったんだな」と理解してあげることが大事です。
障がいのある子どもを取り巻く環境などで、寒川町にはどのような特徴がありますか？
寒川町は、ひよっとしたら障がいがあるかもしれない子を含めて、多くの子どもたちが保育園や幼稚園などに通っています。障がいがあるかもしれない子が、同世代の子どもと一緒に育っている環境があるということが寒川町の特徴で、また良いところであるといえます。
最後にひとことお願いします。
皆さんに障がいのある子どもに対する関心を少しでも持ってもらえたらよいですね。障がいのある子を見かけた時に、眉間にしわを寄せずに、「色々な子どもや家族もいるんだ」と受け入れていただくことが、その人たちの居場所をつくる第一歩になり、そういった場所が町内に増えていけばいいと思います。

もしも子どもの育ちなどに困ったときは…
子どもの状態に変化があったとき、困ったことが起きたとき、生活がしづらいたときには、身近な支援者や相談機関などへできるだけ早く相談することが大切です。目の前で起きている事柄へ対処的な対応を続けることで、悪化する可能性もあるからです。
お子さんが、現在、関わっている人や関わったことがある人、例えば、保育園



特集 認め合い、ともに生きる社会へ

—(副題○○○○○○○○○○)—

今は健康でも、突然の病気やケガが原因で障がいを抱える可能性は全ての人にあり、私たちにあって、障がいとは身近なもの。それなのに、障がいについて、意外と知らないことばかりという人は多いのではないのでしょうか。今月号では、障がいのある子どもをクローズアップし、どのように日々暮らし、何に困っているのか、そのために私たちは何ができるのか、一緒に考えてみませんか？

岡福祉課 ☎内線●●●● 障がい福祉担当 FAX(●●●●●●)

子育て・子育ては地域の受け入れがあつてこそ
「私たちは、障がい児を育てようと思っているわけではないんです。我が子を育てていきたいだけなんです。どうしてそれを理解してもらえないのか？」
軽い知的な障がいと発達障害の特性を持つお子さんのお母さんの言葉です。我が子の成長について、どう子育てしていけばよいかを相談したところ、その子の障がいについての説明をされたようです。お母さんの知りたかった「我が子」の子育てについて一切触れられなかった悲しさ、口惜しさの言葉でした。
親にとって自分たちの子どもは「子」でしかありません。すべての親が我が子の健やかな成長を願っていることでしょう。一方、その思いとは裏腹に、「親としての子育ての不安」それによる「親としての子の育ちの不安」を同じくらい抱えているのではないのでしょうか？
「我が子」が家族だけでなく「地域」から「子ども」として認められ、受け入れられなければ、家庭だけで「子育て・子育て」を抱え込むことになりかねません。
「我が子」が地域に受け入れられているからこそ、親が生き生きと子どもを育て、比例するように子どもがその子らしく健やかに成長していくのだと思います。

「子どもは子どもでしかない」とあるお子さんとご家族のエピソード
「子ども」にはどの子どもにとっても必要な配慮が必ずあります。その配慮は子どもによって違い、それがその子にとっての特別な配慮なのです。そして、どの子どもにも共通する配慮は、受け入れた温かな眼差しではないでしょうか。
■乳幼児期
ある公共の場のこと。落ち着きがなく駆け回り、目につくものを手当たり次第に触れていました。人の目が気になり、子どもに注意しましたが全く聞いてもらえず、つい厳しい口調で注意した時、「好奇心旺盛で活発なお子さんですね」と声をかけられました。目から鱗とはこの事で、子どもの事を見つめ直すきっかけになった大事な言葉です。
■小学校期
小学校の卒業式前、行きつけの床屋さんに行きました。マスターから「小学校卒業と同時に、床屋にお母さんと一緒に来るのも卒業だな」と、話をしたいんだ事をきつかけに、息子もその気になり、親としても背中を押してもらえた気持ちになりました。中学からは一人で床屋に行っています！
■中学校期
息子は、放課後や休みに一人で出かけるようになりました。一緒に買い物などに行くと、知らない方が息子に声かけや、挨拶をしてくださることがあります。驚きもありますが、地域に見守られ、つながっているというこのことを感じ、嬉しくなりました。
■高校期
高等部から養護学校に進み、その養護学校の卒業式の帰り道のこと。中学時代の同級生とばったり出会いました。久しぶりに会った子どもに声をかけてくれ、本人も嬉しそうに話をかけてくれました。さらに私にとって嬉しかったのは、数日後の中学時代の同窓会にお誘いいただいたことです。当日、本人が誰よりも嬉しそうに出かけて行ったのは言うまでもありません。